

李贄の經世論

——『藏書』の精神——

佐藤鍊太郎

はじめに

明末の王學左派の思想家、李贄(1527—1602)は、俗文學の批評家、儒教の叛逆者、眞理の探求者として有名なので、本稿の標題は讀者に、經世論などあるのかという不審の念を懐かせるかも知れない。だが、李贄の評論の中心は經世論にある。標題の「經世」の二字は、治貴適時、學必經世(『藏書』卷三五「行業儒臣」附評)

という李贄の言葉から取ったものである。「政治は時勢に適應するところが大切であり、學問は世を治めねばならない」という意味からも明らかのように、本稿でいう經世論とは政治論を意味している。副題は『藏書』に示された李贄の經世の精神の意であるが、これも『藏書』について李贄が、

此吾精神心術所繫(『焚書』卷一「答焦漪園」)

予一生精神所寄也(『枕中十書』袁宏道序)

と述べていることに因む。『藏書』六八卷は、正史を中心資料として戦國初から元代までの君臣を評論した歴史書ではあるが、『藏書』卷四〇「司馬遷傳」評で、「著作するとは、感慨を興して氣持ちを抑制

しきれないということ、または、感情が激昂して言葉をやわらげられないということだ」と述べているように、李贄が直面した明末の現實に觸發されて執筆されたものと考えられる。従って『藏書』の經世論は、李贄が身を置いた歴史的社會的状況の中で理解されねばならないのである。

李贄の經世論は、特定の社會階層の經濟的利益を代辯しているものではなく、官僚の視點に立って現實の漢民族國家の安全と民生の安定を志向するものである。その特色は、臣下の個人的道徳と政治的實績とを區別し、個人の道徳的正しさよりも政治上有益な才能を重視するという能力主義的人材登用論にある。李贄は『藏書』に於いて政治的現實主義の見地から、爲政者の道徳的修養を治政の要とする朱子學的道徳主義に批判を加えたが、それは現實の官僚人事への不満を表明したものである。また、李贄の自殺は、經世論の挫折を意味せず、俠士として死所を擇んだ結果である。

本稿は、李贄の經世論について、とりわけ『藏書』の能力主義的人材登用論に焦點を當てて、歴史的社會的状況と關連づけて解釋を試みるものである。博雅の御批正を頂ければ幸いである。

一 『藏書』の地位

まず、李贄の經世論に占める『藏書』の地位について考えてみた。次に挙げるのは、萬曆二十六年夏、李贄が南京永慶寺滯在中に著わした『讀升菴集』卷七所收の「經史相爲表裏」と題する一文である。經書と史書は同一物である。史書であつて經書でないとしたら、穢れた史書である。どうして鑑戒を垂れることができようか。經書であつて史書でないとしたら、繪空事を説くものである。どうして事實を彰らかにできようか。故に『春秋』一經は春秋一時代の史書である。『詩經』『書經』は二帝三王以來の史書である。そして『易經』は經書と史書の由來、及び道の有様が屢々變遷して一つに固執できないことを人に示している。故に『六經』はみな史書であると謂つてよい。

右は、楊慎(1498—1559)が經書と史書の相即不離性、相互補完性を認めて「經史相表裏」と表現した考えを更に一步進めて、從來は經書の補助物と看做されていた史書の地位を經書と同列に並べた見解である。李贄が「經史一物」「六經皆史」と述べる以前に、『傳習錄』に據れば、王陽明が『六經』を史書とし、史書は善を奨励して惡を戒めるものだという考えを示している。しかし、これは史書を經書と同一視しているわけではない。李贄は、經書については事實性を要求し、史書については鑑戒性を重視することで、經書と史書の區別を止揚し、いずれも事實を根據として教訓を垂れるべきものとしたのである。従つて李贄の經世論に於いて史書である『藏書』の占める地位は極めて重いと云わねばならない。史書の持つ政治的有用性を認識した李贄は、『藏書』に於いて歴史的事例に基づいて經世論を展開している。

彼の史書に對する考えは、清の章學誠(1788—1801)が「六經皆史」を唱えて史學を經世の學と考へたのと軌を一にしている。

二 『藏書』執筆の時期

『續焚書』卷一「與焦弱侯」等に據れば、李贄は萬曆九年から同一二年まで、湖北省黃安の王雲山にある歌家の天窰書院に客寓していた間に、「讀史」數十篇を著わしている。これが『藏書』の初稿の一部と推定されるので、初稿の執筆時期の上限は、萬曆九年である。そして、『焚書』卷一「答焦漪園」に據れば、李贄は萬曆一十六年夏、湖北省麻城の龍湖湖畔の維摩庵で剃髮した直後に、初稿の寫しを南京にいらる焦竑(1541—1620)に寄せ、

この一書は千百年間(の史實)に關する是非判斷であり、(採録した)人物は八百人を數え、原稿も澤山あつて二千葉を超えるでしょう。(中略)『藏書』だけは秘藏しておくべきなのですが、その論著がまああの出来なのが嬉しくて、知己と一度議論したいと思ひ、それで差し上げるのです。その中の人數が多過ぎて、すべて妥當とは限らないのは、『晉書』『唐書』『宋史』の罪であつて私の責任ではありません。(中略)今この『藏書』の諸傳が全て妥當だとは謂いきれませんが、その是非判斷は前人のために鬱憤を晴らすには十分なものだと思います。決して俗士に見せてはなりません。

と述べて序文を請うている。従つて初稿の執筆時期は、萬曆九年から同一六年の間である。『續焚書』卷一「與焦弱侯」に據れば、李贄は、萬曆二十五年五月から八月までの大同滯在中に『藏書』に二度目の修訂を加えている。そして、『續焚書』卷一「與耿子健」に據れば、李贄

は二次の修訂を経た第三稿について、

この書は、萬世治平の書です。天子が經書を學ぶ席に御進講すべき書であり、科擧の試験場で士を選抜すべき書です。

と述べている。『續叢書』卷一「老人行叙」に據れば、李贄が『世紀』八卷「列傳」六〇巻から成る第三稿を焦竑に渡して校正と上梓を一任したのは、萬曆二五年九月のことであり、『藏書』巻首の焦竑の序に據れば、『藏書』初刻本が上梓されたのは、萬曆二七年秋のことである。焦竑は、萬曆二二年から二五年まで東官講官を勤める傍ら、國史編纂事業に參畫し、二五年には順天鄉試の主考となつてゐる。李贄は『藏書』を焦竑に托すことで、政治に活用してもらおうと考えたようである。だが、初稿については、正史にみえる既成の人物評價への不満を晴らした個人趣味の書なので公表すべきでないと考えていたのに、第三稿については、經世の書だから公表すべきだと考へていたようになったのは何故であろうか。これは修訂内容に關わる問題であるが、初稿に批評、圈點を加え、構成に手を入れたという事實以外に具體的修訂内容は不明である。そこで、李贄が考へを變えた理由を明らかにするため、萬曆九年から二五年までの李贄の經世論を跡づけておく必要が生じる。

三 『藏書』成立の背景

經世論は、個人が身を置いた歴史的社會的状況の推移に隨つて、その具體的内容も變化を見せると考へられる。李贄の經世論の場合には、萬曆二〇年を境として變化を見せている。そこで便宜上、萬曆一〇年代と萬曆二〇年代とに分けて、李贄の經世論の特徴を確認してみよう。

萬曆一〇年代の經世論（官僚批判）

萬曆一〇年代の李贄の經世論を考へる上で無視できないのは、耿定向（1524-1586）との論争である。この論争を契機として、李贄は過激な官僚批判を展開するからである。まず、論争に至る経緯をみてみよう。

萬曆八年、五三歳で雲南省姚安府知府を辭任した李贄は、萬曆九年から耿家の天啓書院に客寓し、耿定向、耿定理兄弟らと學問を講究する傍ら、耿家の子弟に教授していたが、萬曆一二年七月に親友の耿定理が亡くなると、耿家の子弟の教育問題をめぐって耿定向と意見の對立を見るようになる。同年八月に都察院副都御史の地位に進んだ耿定向は、息子の克明らが李贄の影響を受けて科擧の受験勉強や子供を儲ける生殖に勵まなくなるのを心配して、しばしば李贄を訓戒するようになる。李贄は耿家客寓を潔しとせず、萬曆一三年三月、湖北省麻城へ居を移す。同年耿定向は刑部左侍郎となる。そして萬曆一五年、李贄は妻子を郷里の泉州に歸した後、耿定向への反論を展開する。同年一月、耿定向は南京都察院右都御史に昇格し、以後三年間、行政監察の重責を任せている。李贄の耿定向への反駁書簡を載せた『焚書』（初版）が出版されたのは萬曆一九年頃である。従つて、萬曆一〇年代の經世論は、耿定向への反論に見出すことができる。『焚書』巻一「答耿中丞」に據れば、李贄は次のような欲望肯定の人材登用論を提示している。

そもそも天下の人民は衆多です。もし必ず民がみな自分の條理の通りであるよう望むとしたら、天地にさえ出來ないことです。だから、寒氣は膠を折ることはできても、朝市に赴く人を屈することはできないし、熱は金を融かすことはできても、競争する人を

屈伏させることはできません。何故なら、富貴利達は自分の生まれながらの五官を満足させるものなので、成り行きがそうなるのです。だから聖人はそれに順います。順えば安んじるのです。そのため、財物を食する者には俸祿を與え、權勢に趨る者には爵位を與え、有力者には權力を與え、有能な者は能事に應じて官職に就け、軟弱な者は支えてやって使い、有徳者は名目的地位にまつり上げ、人々が共に仰ぎみる人物を取りたて、高い才能のある者は重職につけて金銭の收支を問題としないのです。各自が好みのままにし、各自が長所を伸ばせば、一人も役に立たない人は居りません。

右は、爲政者の個人的道徳的理念を官吏登用の絶對的基準とせず、適材適所の人事が行なわれるよう任用基準を多樣化せよという主張である。また、『焚書』卷一「答鄧明府」に據れば、李贄は次のように「邇言」を重視すべきことを説いている。

例えば、財貨を好むこと、女色を好むこと、學問に勵むこと、積極的に求めること、金錢寶物を多く蓄積すること、田宅を澤山買つて子孫のために謀ること、風水の占いを博く求めて子孫の福蔭を謀ること等、世間の全ての生計産業は、みな人が共に好み、共に習い、共に知り、共に言うことであり、これが眞の邇言です。(中略) 故に嫌がられることも念頭におかずに常にこの言葉を提唱しました。それなのに令師(耿定向)は逆に私のことを、人に害を與え、彼の門弟や子息を騙して誘惑するものと思ひ込まれ、痛く私を憎惡しておいでです。(中略) 令師が御自身で爲さることは、少しも邇言と異なることはありません。それなのに、學ぶ者に告げられる場合には、必ず、「専ら道徳に志し、功名を求めてはい

けない、官位俸祿を食欲に望んではいけない、損得を心配してはいけない、財貨女色を貪ったり、寵妾田宅を澤山買つて子孫のためを謀ったりしてはいけない」とおっしゃる。一切の邇言を毒藥か鋭利な刃物のように看做しておられる。

右のように耿定向の言行の不一致を批判する根據となつた「邇言」とは、金錢欲、色欲、企業欲、所有欲、幸福追求欲を表現した言葉である。李贄はこれらの欲望を追求することを人間の普遍的營爲として是認した上で教化すべきだと主張している。彼は、爲政者が欲望を否定した虚偽の道徳を説くだけでは、現實に即した教化は行なえないと考えている。これに對して耿定向は『耿天臺先生文集』卷六一「與鄧令君」に據れば、「邇言」の内實を五倫としており、現實の教化に於ける五倫の重要性を信じていたので、五倫に固執して現實の官僚や民の實態から乖離することを戒める李贄とは議論が噛み合わない。

李贄は、上記のような耿定向との論争と並行して、自己の保身と利益にのみ關心を持つ官僚の偽善的實態を批判し始めている。例えば、彼が萬曆一六年に編纂した『初潭集』を見ると、卷一一「釋教」評では、「表では道學を治め、陰では富貴を計る。衣服は儒裝だが行ないは犬や豚のようだ」と痛罵し、卷一九「篤義」評では、

聖人の言葉を引用して自分で不能を掩蔽する。(中略) 自分に利益があれば、常に公事を口實にしたいと考えて、必ず萬物一體の説を引用し、自分に損ならば、怨みや嫌疑を遠ざけようとして明哲保身の説を引用する。

という風潮を批判している。ここには官僚が經書の文句を隠れ蓑として保身を計り、個人的利益を追求する實態への憤りが見られる。李贄が『焚書』卷三「童心説」で經書の相對性を説いた理由が、ここにあ

る。

李贄はまた、『焚書』卷一「答鄧石陽」で、「衣を着ること、飯を食べるのが人倫です。着ること、食べることを除いてしまつたら人倫は無くなりませう」と提言し、同卷三「復鄧鼎石」では、官府が商人に出資し、豊作地帯から穀物を買いつけて民に配給する、という飢饉を防止するための具體的救済策を示している。これは民の生存要件である衣食が満たされていないという現實認識に基づく提言である。

『姚州志』卷五「循吏」、『李中谿全集』卷六「姚安太守卓吾先生善政序」、『姚安縣志』卷一四「輿地志・交通」等に據れば、李贄は、萬曆五年から八年までの姚安府知府在任中には、民衆教化、儒教教育に努め、自分の俸給を割いて荒廢していた廟や府學を修築し、祭祀典禮を復興し、自ら率先して儉約の生活をし、法令を簡潔にし、民生上必要な制度を設け、農閑期に姚安府の西の連水に石橋を架けて交通の便を計るなどして官吏や民の信望を得たという。『焚書』卷三「論政篇」、同「感慨平生」等に據れば、知府としての李贄は、爲政者が自己の道徳的理念によって被治者の在るべき姿を前提として規制を加えることを批判し、被治者の現實態を重視する必要性を説いている。李贄の經世論は、退官後も變化しておらず、基本的には、爲政者の道徳的修養と民の實態を尊重する被治者本位の行政との二點を重視し、かつ爲政者個人の倫理的正しきよりも民生の充足の方に重い比重を置いている點に特徴がある。『藏書』の初稿には、官僚の獨善的道徳主義への批判と民生の安定を重視する視點とが反映していたと思われる。

萬曆二〇年代の經世論（三大征と危機意識）

萬曆二〇年代の經世論を跡づけるに當り、看過できない歴史的事件が三大征（ポバイの亂、豊臣秀吉の朝鮮侵略、揚應龍の亂）である。三大

征を背景として李贄が展開した經世論を検證してみよう。

(1) ポバイの亂（萬曆二〇年三月—九月）

『焚書』卷二「復麻城人書」に據れば、西北部の寧夏でポバイの亂が起つたことを知つた李贄は、朝廷の優柔不斷な對應に憤慨して「二十分議」「因記往事」の二文を著わしている。『焚書』卷四「因記往事」では、嘉靖末から萬曆初にかけて中國東南沿海で猛威を振つた海賊林道乾の才能、見識、膽力を稱讚しつつ、朝廷の官僚人事の不公平が有能な人材に不満の念を懷かせ、盜賊行爲に驅り立てていると指摘し、保身に汲汲として國家の危急に對處しえない官僚について、

一旦危急があれば、互いに顔を見合わせ、顔色を青くし、果ては互いに責任逃れするのを明哲保身だと心得ている。思うに國家がこんな連中はかり任用したので、いざという時に使える人がいないのだ。

と批判している。當時、武昌の洪山寺に滞在していた李贄は、『續焚書』卷二「西征奏議後語」に據れば、湖廣左布政使の劉東星と問答している。劉東星が倭寇鎮壓を優先事とし、ポバイの亂の對策としては恩赦によって歸順させることを考えたのに對し、李贄は、ポバイの亂鎮壓を優先事として、

今もし舊習に拘泥して大誅殺を行わねば、恐らく悪事をまねる者が衆く、うわさを聞いて立ちあがるでしょう。單に西夏が憂慮されるだけではありません。かつ西夏は戎虜（タタール）に密接しており、一番の關中の要所です。

と述べて、ポバイの亂が民變と夷狄の中國侵入を觸發しかねないことに危機感を示している。四月に、親交のある御史の梅國楨がポバイの亂鎮壓軍の監軍に任命されると、李贄は早期の鎮壓を期待している。

(四) 豊臣秀吉の朝鮮侵略(萬曆二〇年三月—二六年末)

袁中道『遊居柿錄』卷九第九七九條に據れば、明朝に朝鮮からの援軍要請が来た萬曆二〇年五月には、李贄は『水滸傳』に批點を加えている。『焚書』卷三「忠義水滸傳序」に據れば、批點を加えた意圖は、夷狄に對する民族の憤りを晴らすこと、官僚人事の不正を批判して人材登用を主張すること、叛亂者に朝廷への投降を勧め、君國への忠義を呼びかけること、人事擔當者の參考に資することの四點にある。李贄は内亂と外敵への危機感から、「水滸傳」を經世教化に利用すべく批點を加えている。これは、王陽明が『傳習錄』卷下で、

いま民衆の風俗を淳朴に還せうとするなら、今の戯曲を取って、そこから淫猥な文句や曲調を取り除き、ただ忠臣孝子の物語を取り上げ、愚鈍な一般民衆各自に理解し易くしてやれば、知らず知らず彼らの良知が觸發されて、かえって風俗教化に益がある。

と述べている考えを實踐したものと云える。萬曆二十一年一二月には、舊友の薊遼總督顧養謙が朝鮮での戦争處理を命じられ、秀吉を日本國王に封じて朝貢を許すことで事態を收拾しようとしたが果せず、翌二二年夏に辭任している。李贄は顧養謙が再び任用されないことを再三惜しんでいる。

(イ) 揚應龍の亂(萬曆二五年七月—二八年六月)

貴州省播州で揚應龍の亂が起った時、李贄は大同巡撫となった梅國禎の招きで、北方防衛の前線とも言うべき大同に滞在しており、『藏書』に二度目の修訂を加え、かつ『孫子參同』一三篇を著わしている。『續焚書』卷一「與友人」に據れば、當時の官僚人事について不満を持っていた李贄は、

今日、邊境が次第に多事多難となっているのに、眞の才能ある人

が毎日解任されているので、扼腕太息せずにはおれない。

と嘆いている。また、『孫子參同』序では、儒者が文武を分離して武を輕視することを批判し、軍事を重視すべきことを説いている。そして「始計篇」の評では、無能な文官が、經書の文句や個人的品行を楯に取って、軍事的に有効な建築や、武將の能力發揮を妨害している現實について批判し、

正しい發言があつたとしても、どんな説なのか理解できず、眞の將軍がいたとしても、どんな人物なのか分らず、「この句は『論語』に合致しない」、「この句は『孝經』に合致しない」、「この説は前に聞いたことがない」、「この人の行ないは好ましくない」、「この人には非議すべき處がある」という。ああ、孫武子を今に生き返らせたとしても、一人の七篇(兵法書)を暗記した受験生に及ぶまい。

と憤慨している。李贄が「藏書世紀列傳總目後論」でも、儒者が軍事を輕視してきことを批判しているのは、偶然の一致とは言えない。以上が三大征の生起した時點での經世論の例である。

李贄は三大征を背景として國家的民族的見地から危機意識を懷き、著作活動を通じて、能力本位の官僚人事の必要性を説き、君國への忠義を盡すことを勧め、官僚が軍事を重視すべきことを説いている。従つて、李贄が「藏書」に二度も修訂を加えたのは、能力主義の人材登用論、忠義の顯彰、軍事の重視といった經世的色彩を濃くするためであつたと思われる。

四 『藏書』の構成

卷首の「藏書世紀列傳總目」(以下「總目」と略稱)には構成が示さ

れているだけでなく、『春秋』の筆法に倣った毀譽褒貶の意が示されている。「總目前論」で、

前三代については私は論じない。後の三代とは漢唐宋である。その中間の千百餘年には是非判断が無かったのは、人に是非判断が無かったからでは無い。皆が孔子の是非判断をそのまま自分の是非判断としたのでは是非判断が無かったのだ。それなら私が人を是非するのはやめられない。

と述べているように、『藏書』では、『春秋』の後を承けて、戦國時代から以後の君臣について、獨自の主觀的判断を示している。李贄は、『藏書』卷三二「樂克論」で、

世に孔子がおられなかつたら、古今の天下に眞の是非判断は無かつた。世に司馬(遷)がいなかつたら、孔子を繼ぐ者は誰もいなかった。

と述べているように、『春秋』を繼ぐものとして『史記』を認めている。『藏書』という書名は、『焚書』の「自序」に據れば、『史記』に擬したものである。孔子の『春秋』刪定の意に倣って『史記』を作りながら、『漢書』で「其の是非はすこぶる聖人に繆る」と譏られた司馬遷に、李贄は自身を投影しているのである。李贄が、非難されることを覺悟で示した獨自の是非判断の特徴について、「總目」に據って検証してみよう。

君主への評價形式

「世紀總目」では、各君主の表記形式が、そのまま評價を示している。例えば、賞讃すべき君主には帝號、廟號を記し、治績の無い君主には附録の意味で「附」の字を書きつけ、非難すべき君主については帝號を剝奪して名を直書しており、書式はほぼ十二段階に分類でき

る。評價が最も高いのは、漢唐宋の創業の君主であり、三王朝を維持發展させた守成の君主である。三王朝末期の君主では帝號を剝奪し、「附」の字を記している。そして、評價が最も低いのは、新の王莽、晉の司馬氏、後梁の朱温など、三王朝の帝位を篡奪した者であり、「篡弑盜賊」「奸臣篡奪」といった貶辭を冠し、姓名を記している。

このように『春秋』の筆法に倣った表記形式には、褒貶の意が見いだされるが、秦の始皇帝について、注で「千古一帝」と評して、中國統一の功績を認めていることを除けば、傳統的君主評價と大差ないと言える。そこで、李贄の筆法の特徴を明確にするために、朱子の『資治通鑑綱目』(以下『綱目』と略稱)と比較してみよう。

『綱目』と『世紀總目』との相違點は、正統論の有無にある。例えば、戦國時代について、『綱目』が周王朝を正統としているのに對して、「世紀總目」は東周、西周として七雄と並べ、「周に王無きこと久し。此れ東西の周君なるのみ。周王には非ざるなり。周王は久しく已に東西の周に寄食せり」と注記している。また、三國時代では、『綱目』が蜀を正統としているのに對して、「世紀總目」は三國を並置し、南北朝時代では、『綱目』が南朝を正統としているのに對して、「世紀總目」は兩朝を並置している。『綱目』が現實の王朝勢力とは無關係に理念的正統王朝を設定しているのに對して、「世紀總目」は複数の國が割據している場合、實際の勢力版圖に即して並置している。この點に李贄の現實主義が認められる。だが、これも徹底してはいない。

例えば、「世紀綱目」では、南朝については姓を記し、北朝では君主の姓名を記し、しかも五胡一六國の内一國しか記載していない。また、唐末の五代一〇國を省略し、遼、金を「附載」とし、元朝については皇帝名を省略している。漢民族王朝に比べて異民族王朝の扱

が疏略であることは、李贄が民族的見地から異民族王朝を輕視していたことを伺わせる。華夷辨別の視點は消えていない。

臣下への評價形式

「列傳總目」では、上記のような筆法は見られず、分類と配列順が評價の違いを示している。例えば、「大臣傳」では、(一)因時(時代に適應する能力) (二)忍辱(屈辱を忍耐する能力) (三)結主(君主に従う能力) (四)容人(他人の技能を認めて任用する能力) (五)忠誠 といふ五基準で分類している。この五種の大員について、「總目後論」では、

自分の資質の限りを發揮し、自分の力量の限りを盡し、いずれも危亂を救い、太平を實現することができた。例えば諸葛孔明が劉禪を輔佐したのを觀るがよい。必ず五者を兼備せねば、大臣の名に値しないと謂うのではない。

と述べている。また、次に位置する「名臣傳」では、(一)經世(行政能力) (二)疆主(君主權を強化する能力) (三)富國(經濟的能力) (四)諷諫(諫言する能力) (五)循良(順法能力) (六)才力(才能) (七)智謀(軍事的才能) (八)直節 といふ八基準で分類している。法家の李斯が「才力名臣」に分類され、主君に背信した呂不韋、李園が「智謀名臣」に分類されているのは、政治的經濟的軍事的能力が重視されている好例である。政治に役立つ能力を道徳よりも優位に置いて分類している點に、傳統的道德主義的評價と異なる能力主義的特徴が認められる。なお、「列傳總目」では、他に「儒臣傳」「武臣傳」「賊臣傳」「親臣傳」「近臣傳」「外臣傳」を立てている。

五 『藏書』の内容

次に、『世紀』『列傳』本文の内容に就いて、(一)君主論、(二)臣下論、

(三)道學論 に分けての經世論の特徴を検證してみよう。

(一) 君主論

李贄が君主を「聖主」と稱讚している理由を整理してみると、國內的功績として、富國強兵、亂世平定、天下統一、治安維持による民生の安定が擧げられ、對外的功績として、攘夷斷行、版圖擴大による國家の安全保障が擧げられる。そして、君主の資質として重視しているのが、臣下の人物、能力を鑑定する見識、私情で賞罰を左右しない嚴正さ、剛毅な性格である。李贄が「庸主」「昏主」「好貨」といった貶辭を加えた君主は、政治的に無能で治績の無い君主である。『世紀』の評を見る限りでは、君主評價の視點は傳統的觀點と異なっていないようである。だが、『列傳』には、李贄の君主論の特色が見受けられる。

例えば、則天武后への高い評價である。則天武后は唐の宗族諸臣を誅殺したことで悪名の高い女帝であり、李贄も武后の傳を『世紀』には入れず、「親臣傳」に置いている。だが、『列傳』の隨所で、「聖后」「大聖人」「聰明主」といった讚辭を加えているので、事實上は君主として認めている。武后に事えた婁師徳、狄仁傑らが「忍辱大臣」として分類されているのも、武后への高い評價の反映である。次に擧げる『藏書』卷五六「李勣傳」評の一節は、李贄が武后を稱讚した理由をよく示している。

試みに近世の王を觀てみるに、武氏のように人を知る者がいたであらうか。また、武氏のように専ら人材を愛し養うことを心掛け、民を安んじることが念願とした者があつたであらうか。このことは、固り萬世の人々の公正な鑑定から見逃されることはありえない。そもそも聰明な君主にとって大切なことは、人を知ることとを難しいと考え、人材を愛し養うことを急務と考えることに盡

きる。

李贄は武后の惡徳行爲と、その人材を鑑定して登用する政治的能力とを分離し、能力の比重を重くして稱讚している。つまり、民の生活を安定させるといふ政治的責任を果している場合には、君主の個人的道徳を問題にする必要はない、と考えている點に特徴がある。

また、『藏書』卷六〇「親臣傳」では、漢の武帝が戾太子に皇位を繼がせようと考へて、「古から國家が亂れる原因は、君主が幼少で母が壯年のためである」といふ理由で太子の母に死を宣告したことを「眞聖人」と稱讚しているが、これもまた、國家の治安を維持するといふ政治的目的を達成するためなら、個人的には非道徳的行爲でも必要として是認するといふ考への表明である。だからと言つて、李贄は殺戮や非道徳的行爲そのものを是認しているのではない。

例えば、李贄が『世紀』で筆誅を加へている君主は、主君の信任を裏切り、主君を弑して帝位を篡奪した君主である。とりわけ晉の司馬氏については、臣下としての節義を重視する觀點から、口を極めて非難している。魏晉南朝及び隋の條に附された批評を見ると、これらの王朝が漢や宋のように永續せず、各王朝末期の君主が非業の死を遂げたのは、創業の君主が殺戮を好んだ報いだとしている。その際、因果應報の觀點から、君主の殘虐行爲を「毒を種えた」と評し、その報いが子孫に現われることを「毒が發した」「天道は還すを好む」と評している。つまり、史實によつて創業の君主の善惡の行爲と子孫の運命との間に因果應報の關係があることを強調して殘虐行爲を戒めていゝる。このように、君主の個人的非道徳的行爲が政治的功績と結びつかないと判断した場合には、君主の非道徳的行爲を認めていない。君主個人の道徳と政治倫理とを區別している。

(二) 臣下論

臣下の道徳よりも能力を優位に置く評價基準を提示した理由を『列傳』に就いて考へてみよう。次に擧げるのは、『藏書』卷一〇「文彥博傳」評の一節である。

そもそも技能のある者は、必ず技能で天下の役に立つ。自身に技能が無ければ、天下の技能が集まつて来る。これが自然の勢いである。故に君主は一人の大臣を擇ぶだけでよい。一人の大臣を擇ぶ基準は技能があることではなく、その人が他人の技能を好むことである。そして君主がこれを好めば天下は平和になるだろう。

(中略)後世の儒者は好惡の理を識らない。一旦國政を執ると、ひたすら君子を擇んで登用して小人を罷免し、それで好惡の正しきを得ていると思ひ込んでゐる。(中略)人に君子と小人の別があるのをどうして無くせようか。君子にはもちろん才があるが、小人だけに才が無いということがあろうか。君子はもちろん用いられることを好むが、かの小人だけが赤黒い顔をして老い果てることに満足するだろうか。どちらも用い場所が無いからとて不平の恨みを抱かせてはいけない。(中略)技能でもつて天下の役に立たない者はいないのに、どうして棄て去るのか。私は仁徳者が追放する相手がまさに小人であつて君子ではないことを恐れている。

右のように、李贄は人事權を掌握する官僚が、道徳を基準として官吏を登用することを批判し、能力主義的人材登用論を展開している。だが、彼は臣下の道徳節義を輕視しているわけではない。例えば、『藏書』卷二八「直節名臣」評では、

主君に事えて身を捧げることは萬世の律令である。ここで發憤しなかつたら、いったいいつ發憤するのか。かの明哲保身の説は、

ただ官位に就いて居ない者の爲に説かれただけで、高い官位に居て厚祿を食む者の爲に説かれたものではない。道學先生が聖人の語を誤って引用して後世の人を誤らせることが無ければ結構だ。と述べている。李贄が萬曆二十四年九月から翌二五年五月までの間に、劉東星父子と問答した記録である『明燈道古錄』上巻第一章でも、「祿を食んで職務に就いたら、主君に報い、忠を竭さねばならない。保身の説は口にしてはいけないだけでなく、心に萌してもいけない」と述べている。

李贄は官僚の道徳的評價と能力的評價を分離している。彼は官僚個人の道徳よりも才能が政治的に有用であるという觀點から、官僚の任用に當っては道徳よりも才能を重視せよと主張している。では、道徳評價と才能評價をどのように分離しているのか、「賊臣傳」「外臣傳」に就いて見てみよう。

例えば、『藏書』卷五七「賈似道傳」評では、國を篡奪する程の才能を持った呂不韋や司馬仲達ほどの巨奸を除けば、逆臣・姦臣として悪名高い晉の王敦や桓温、唐の安祿山、史思明、僕固懷恩、李懷光などの「小人」については、聰明な君主ならその政治的軍事的才能を使うことができたと言つて惜しんでいる。臣下としての悪徳行爲については「賊臣傳」に入れることで批判を示しつつ、才能を惜しんでいるのである。また、「外臣傳」に就いて見ると、『藏書』卷六八「馮道傳」評では、五朝一二君に事えたことから無節操な臣下の典型として非難を浴びた五代の馮道について、大臣として民生を安定させるといふ行政責任を五〇年間果した功績を認めて、その無節操を容認している。とは言え、李贄には君臣道徳を無視できなかったたので、馮道を君臣關係に拘束されない評價分類の「外臣傳」に「吏隱外臣」として入

れたものと思われる。李贄は、民生安定という政治上の至上目的達成のためには、臣下の君主への不忠を許容したわけであるが、その場合の君主については、行政能力が缺如している君主に限定している。彼は馮道のような官僚の在り方が、君臣道徳を無視する口實とされるのを恐れて、凡庸な君主や幼君に仕える場合、亂世、政争時に限定して是認している。しかし、李贄が個人的不道徳を責めず、政治的功績を稱讚したのは、個人道徳と政治倫理とを區別したことに他ならない。

(三) 道學論(朱子學批判の視點)

次に、「儒臣傳」に顯著な道學批判の特徴について、便宜上、(イ)道統論、(ロ)王霸論、(ハ)義利論、(ニ)兵食論、(ホ)學問論、の五項目に分けて檢證し、李贄が道學に批判を加えた理由を考えてみよう。

(イ) 道統論批判

孔孟の道統が宋の周敦頤、程頤、程頤、張載、朱熹によって始めて傳承されたとする道統論については、『藏書』卷三二「德業儒臣前論」で、「どうして宋朝はますます勢いがなくなり、死にかけた人のように息も絶え絶えで、かえってあの傳を失った時代に及ばなかったのか」と述べて、政治的觀點から宋の道學は國家の富強に貢献していないとして批判を加えている。

(ロ) 王霸論批判

仁義道徳による政治を王道として賞揚し、武力による政治を霸道として斥ける王霸論については、『藏書』卷三二「孟軻傳」で、春秋の五霸が周王朝を輔佐して天下の民を安んじた功績を認める見地から批判を加え、また、卷三七「劉向傳」評でも、「世とともに推移するのが治道の必然である」という觀點から亂世にふさわしい霸道を是認している。

(イ) 義利論批判

道義を正して私利を計らないという義利論については、『藏書』卷三二「徳業儒臣後論」では、人が私的利益を追求するのを自然の勢いとする政治的現実的觀點から、「義を正そうとするのは、それを利とすることである。もし利を謀らないとしたら、正さなくてもよいのだ。(中略)功を計らないとしたら、道はいったいいつになったら明らかにできるのか」と批判している。

(ニ) 兵食論

儒者が經世論に於いて、兵(軍備)食(食糧)よりも信(道德)を重視することについては、『藏書』卷四三「張載傳」評で、軍備と食糧の充足が急務だとする政治的觀點から批判を加えている。

(ホ) 學問論

『藏書』卷三五「韓侂胄傳」評では、「政治は時勢に適應することが大切であり、學問は世を治めねばならない」という見地から、朱子の學問について次のように批判している。

私は、先生には必ずや奇謀秘策があり、宋朝を再建し、屈辱を免れさせ、たちまち息を吹き返させ、危機から安全へ、弱から強へと變化させることができ、幼少から學んだことを壯年に實行するのは、まさにこの時だと思った。ところが、立派な策略を朝廷に入って君主に告げたとは聞いたことが無く、ただ内侍について非難しただけだ。これが爲すべき急務であろうか。それとも聖人の正心誠意の學問は、ただ内侍一身の爲に設けられたもので、かの夷狄と中國の強弱を顧慮しないものだったのか。ならば、どうして正心誠意を貴ぶことがあろうか。だが、古より今に及ぶまで、小人を寵免することのできるのが君子であると思ひ込んでいる者

は多い。先生だけのことでない。自分の好惡の感情を満足させることで無窮の害毒を流したのだから、僞學の禁はそれなりの理由があったのだ。

朱子の學問は官僚個人の道德的正しさを嚴格に要求するだけで、漢民族國家の危機を救うことができなかった、という批判の裏には、官僚個人の道德問題の解決が、それだけでは政治問題の解決に連續しないという認識がある。以上のように、李贄の道學批判は一貫して道德と政治を區別する視點からの批判である。では、彼が道學を批判する意圖はどこに在るのであろうか。

李贄が登用できるとした人材は、傳統的評價では道德節義が政治的才能より重視されていた爲に排除された有能な人物である。このことは、『藏書』成立過程に於いて、彼が國家的見地から官僚人事に不満を示して、人材登用の必要性を強調していることと符合している。従って、『藏書』で道學、即ち體制教學である朱子學を批判している理由は、突き詰めて見れば、現實の文官武官の人事問題に歸着する。つまり、道德を人材登用の基準として重視した朱子學が、明朝の危急、民生の危機に際して無能な官僚が有能な人材の登用を妨げる口實を與えているからに他ならない。道學批判の意圖は、人材登用基準に於いて個人道德の比重を軽くして、政治的軍事的能力の比重を重くすることで、能力主義的人材登用を訴えることにあったと言える。

六 李贄の精神

道德が政治の絶對的支配原理とされていた明末にあって、道德と政治とを意識的に區別し、しかも、道德的價值基準を能力的價值基準の下位に置いて相對化するということは、自殺行爲であったと言える。

事實、『藏書』の内容は、李贄彈劾の口實となっている。李贄が『藏書』を俗士に見せてはいけないと考えていたのは、その危険性を十分に知っていたからだと考えられる。では、官職とは無縁な境涯にあった李贄が、生命を賭してまで、『藏書』の出版に踏み切ったのは何故であろうか。これは、政治的國家的見地から人材登用の必要性を感じたからという理由だけでは説明のつかない問題であり、彼の死生觀と深く關わる問題であると思われる。そこで、李贄が自殺した理由について、考察を加える必要が生じる。自殺時の状況について、袁中道「李溫陵傳」では、

ある日、侍者を呼んで髪を剃らせた。侍者が離れた隙に剃刀で自ら喉を割いたが、二日間意識を失わなかった。侍者が、「和尚痛みますか」と問うたところ、指で手のひらに「痛まない」と書き、さらに「和尚はどうして自殺を計られたのか」と尋ねると、「七十の老翁何の求むる所かあらん」と書いて、そこで息絶えた。

と傳えている。この末期の一句は、唐の王維が戰國時代の魏の侯嬴について詠んだ「夷門歌」の一句である。この事實は、李贄が自身を侯嬴に擬していたことを示唆している。侯嬴は、知遇を得た信陵君と友の朱亥との軍事的成功を祈り、自ら頸を刎ねて見送った人物である。

『藏書』の「列傳總目」では、「忠誠大臣」「智謀名臣」「直節名臣」それぞれに名が見え、傳は「直節名臣」に置かれている。李贄は、「嬴は思ふに俠骨があり、深謀遠慮があり、隠者であった」という評を加えている。「俠骨」とは何であろうか。その内實について考えてみよう。

『李溫陵外紀』卷三所收の袁中道『柞林紀譚』に據れば、萬曆一八年春、湖北省公安に遊んだ李贄は、袁宗道、袁安道、袁中道と問答した時、王學左派の王心齋、徐波石、顔山農、何心隱などの人士につい

て、「俠客」であり、「各自に身を殺して悔いない氣象があった」と稱讚している。そして「俠」の意味について李贄は次のように解説している。

今の人はみな俠を識らない。俠は人に従い、夾に従う。人を脇から支えることができるのである。例えば、千萬人が危急に瀕している場合、この一人を得れば安全であり、この一人を失えば危険である。各自がこれを頼みとして始めて俠というのだ。今の人が俠を識らず、轉じて擊劍で讐に報いるのが俠だと思つてるのは甚だおかしい。

李贄の言う「俠骨」とは、自身の危険を顧慮せず、人の危急を救おうとする氣骨のことである。彼は『焚書』卷四「崑崙奴」でも、「忠臣は俠であり忠であるから（國家が顛覆する危機に扶けとなり支えとなる。（中略）俠士が賞ばれる理由は、才智兼備して、事に死すことを困難とせず、事を成就するからである。もし死んで事を成就できぬら、死ぬこともまことに困難ではない。（中略）古より忠臣孝子、義夫節婦はいずれも俠であった」と述べている。そして『焚書』卷二「與焦弱侯」に據れば、李贄は萬曆二五年には俠士として死ぬことへの憧れを示し、

死んでもなお俠骨の香りを聞かれ、死んでもなお烈士の名聲が残るとしたら、どうして龍湖の死所と比較する必要がありません。妻子の手に抱かれて死ぬことを認めない者はみな、必ず朋友の手に抱かれて死にたいと意志を決めている者です。

と焦竑に心境を傳えている。『焚書』卷四「五死篇」では、智者は死處を擇ばねばならないとし、『續焚書』卷一「與耿克念」でも、「思うに人生には一つの死があるだけで、二つの死は無いのだが、世の人が

自分で迷うだけのことだ。有名で死ぬのと無名で死ぬのとどちらが良いか、智者には自然に分かることである」と述べている。ここに自殺の内的動機が認められる。では、外的状況はどうか。萬曆二十七年の『藏書』出版時と同三〇年の自殺時の状況とを振り返ってみよう。

『明史』食貨志に據れば、三大征への出費などで経済的危機が深刻化した明朝では、萬曆二十六年以後、全國に多數の宦官を徵稅使として派遣し始め、横暴な徵稅使のいたった土地では、萬曆二十七年以降に抗稅の民變が續發している。この物情騒然とした社會状況の中で、李贄は、『焚書』卷二「書晉川翁壽卷後」に據れば、當時、工部侍郎兼河漕總督の任にあった劉東星に對して、當局者に天下の状況と聖主を輔佐して人材を登用する方法とを教示するよう期待し、同卷「復晉川翁書」では、

そもそも臣子の君親に對する關係は一理です。天下の財はみな君主の財です。やや多用してもかまいません。天下の民はみな君主の民です。やや虐く使役しても忍受する他ありません。しかし、大賢が君民の間にいれば、必ず調停の術があります。過度にならねば十分です。下を調停するのは良いのですが、斷じて上に叛逆してはいけません。

と述べて、劉東星が萬曆帝と民との中間にあって、帝の意にさからわず、かつ、民の爲を計って混亂を調停することを期待している。徵稅使の派遣を皇帝の私權力の亂用として批判することはしていない。

李贄は、萬曆二十九年春から順天府通州の馬經綸宅に滞在し、病氣療養中に最後の著作『九正易因』を完成すると、多から病床に就き、萬曆三〇年二月五日には、「遺言」を作り、自分の遺骸の埋葬法を指示している。既に衰弱して歩行困難な容態にあった彼が、彈劾されたのは

閏二月である。『萬曆野獲編』卷一〇「黃慎軒之逐」、同卷二七「二大教主」等に據れば、彈劾の背景には、李贄と交際した陶望齡などの佛教を信奉する官僚を排斥したいという首輔沈一貫の意向があったという。佛教信者である官僚への見せしめとして逮捕されたわけである。禮科給事中の張問達の李贄彈劾文に據れば、彈劾理由は、『藏書』の内容が儒教道德を無視していること、佛教に感蕩して麻城で不純異性交遊をなして風俗を害したということである。李贄が麻城で梅國楨の娘の澹然などの尼僧と禪問答したことが淫行として捏造されている。勅旨は彈劾を容れ、「惑世誣民」の罪名の下に逮捕令を下し、著書を燒却處分に付したのである。李贄は錦衣衛の長官から尋問された時、自著について、「聖教を益することはあっても損なうことは無い」と斷言している。馬經綸が情理を盡して當局に無實を訴えた結果、李贄の處分は本籍地（泉州）に送還されることに内定する。佛教感蕩という點では、太祖以來、皇帝から官僚に至るまで、儒佛道三教を兼修する風潮があり、萬曆帝の恩赦の詔書にも佛典が引かれていた状況から考えても極刑の理由とはなりえない。それにも拘わらず、獄中で病床にあった李贄は、三月一日、侍者の隙をみて剃刀で自刎し、翌一六日子の刻に息を引き取る。そして、李贄の遺骸は、通州城北の迎福寺の側に、馬經綸の手で遺言通りに埋葬されるのである。享年七十六歳。

以上のことを考え併せると、李贄が自殺したのは、俠士としての名聲を後世に期待し、かつ朋友の手で葬られることを望んだからである。李贄が『藏書』の出版に踏み切ったのは、經世濟民に生命を賭する精神の爲せる業である。彼が死所を得たことで、著書に托された經世の精神は後世に不朽の輝きを得るのである。

おわりに

李贄は史書の政治的有用性を認識し、『藏書』に於いて、歴史的事例に基づいて自分の經世論を展開している。彼が萬曆一〇年代に『藏書』の初稿を執筆した動機は、官僚の獨善的道德主義が、民生の安定という政治問題の解決を妨げ、さらには官僚の利己的偽善性を助長しているという現實への憤りである。このため彼は、道德的觀點から記述された正史の人物評價について、『藏書』に於いて政治的見地から再検討を加えている。更に彼は、萬曆二〇年に始まる三大征を背景として、國家的民族の見地から明朝の治安状況の悪化に對する危機感を深め、君國への忠義を賞揚し、官僚が軍事を重視すべきことを説き、能力優先の人材登用の必要性を説くようになると、『藏書』にも修訂を加え、經世の書としての性格を強化している。

『藏書』の經世論は、基本的には、漢民族國家の繁榮と民生の安定を志向している。そして、その特色は、過去の君臣について、各自の個人的道德性と政治的に有用な能力とを意識的に區別して、能力を重視して評價している點にある。そのねらいは、現實の人材登用基準に於ける個人道德の比重を軽くし、政治的經濟的軍事的能力の比重を重くすることによって、有能な人材が任用される道を擴げることにある。李贄が人材登用論に於いて、道德的基準を相對化し、政治的能力的基準を優位に置いたのは、君主と官僚の道德的修養がそのまま政治問題の解決に直結する、と考ふる朱子學的政治觀への生命をかけた批判である。『藏書』は道德から政治を分離した政治思想書として讀まねばならないと思われる。

李贄が自殺したのは、儒教への叛逆者、あるいは社會への批判者と

して挫折したためではなく、經世の精神を發揮した俠士として歴史に名を残そうとしたためであると言つてよい。

二〇〇

(1) 例えば、島田虔次『中國における近代的思维的挫折』（筑摩書房、一九四九年）では、李贄の思想の中核を「童心」（判斷的自己）として捉え、これを儒教倫理に支配された社會に對抗するヨーロッパ近代的自我として位置づけ、「儒教の叛逆者」としての李贄の自殺を挫折と見ている。また、溝口雄三『中國近代思想の屈折と展開』（東京大學出版會一九八〇年）では、李贄について、舊來の天理（去人欲的天理）に對して明末にふさわしい新しい天理（存人欲的天理）を模索した求道の人として捉えている。また、奥崎裕司『中國郷紳地主の研究』第五章（汲古書院、一九七八年）では、李贄は士大夫として既存の思想や專制體制を再編補強することを主張したとし、その經世論を專制體制維持論と規定している。いずれにせよ、李贄の經世論については充分な跡づけがなされていない。

(2) 例えば、朱謙之『李贄——十六世紀中國反封建思想的先驅者』（湖北人民出版社、一九五六年）では、中小地主階層と新興都市市民階層との二階層の利益の代辯者としている。詳しくは、森紀子「中國における李卓吾像の變遷」、『東洋史研究』三三卷四號、一九七五年三月、延青「評價李贄思想上の一些不同觀點」、『學習與批判』一九七四年第一二期）等を参照。

(3) 『藏書』の底本としては、中華書局排印本（一九五九年初版、一九七四年再版）を用いる。なお、『續藏書』については、本稿では取り上げない。詳細は、拙稿「李贄『續藏書』について」、『東方學』第六七輯、一九八四年一月）を参照されたい。李贄の事蹟については、鈴木虎雄「李卓吾年譜」、『支那學』第七卷二・三號、一九三四年）、容肇祖「李贄年譜」（三聯書店、一九五七年）、陳泗東「李贄的家世、故居及其妻墓碑」

『文物』一九七五年第一期、張建業『李贄評傳』（福建人民出版社、一九八一年）等を参照されたい。また、著述年代については上記の諸書の他に、崔文印『李贄著作編年與考辨』（『中國哲學』第二輯、人民出版社、一九八四年）が参考になる。

(4) 小島祐馬『李卓吾と『六經皆史』』（『支那學』第二二卷五號、昭和二十二年）を参照。

(5) 溝口雄三『中國前代思想の屈折と展開』（既出）七二頁から九三頁を参照。

(6) 拙稿『李卓吾評』『忠義水滸傳』について、『東方學』第七一輯、一九八六年一月）を参照。

(7) 楊寔『晚明之反衛道史學』（『大公報』中華民國三十五年六月五日）、同「再論晚明之反衛道史學——評藏書世紀目錄」（同七月三十一日）を参照。

(8) 『藏書』の内容の詳細については、山下龍二『李氏藏書について』（『白』）『名古屋大學文學部研究論集』LXXXIX（一九八一年）、白『同論集』LXXXIV（一九八二年）に紹介があり、参考になる。ただ、李贄批判の見地に立って、先行諸思想との関連性について羅列的網羅的に論じており、朱子学批判、政治的能力の重視といった『藏書』の特徴について指摘しているにも拘わらず、歴史性を捨象し、『藏書』の經世書としての獨自性を認めず、過去の歴史事實のルポルタージュと見做している。